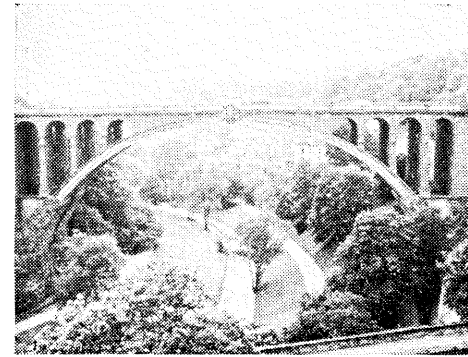


ヨーロッパの旅

—— ルイクサンブール ——

平井信義

私が、ふと、国境の町を見ようと思ひ立ったのは、ちょうど、木の芽が萌え出ようとする復活祭の休日の頃であった。



谷は美しい公園になっている。

ヨーロッパは、これまでにしてしばしば国境をかえている。第一次世界大戦の後にも、今度の大戦のあとにも……。そして、もつと以前の歴史においても、国境ははげしく変化した。昨日までの自国の町は、明日には敵国の町になるといふ歴史を繰り返してきたのであるし、中には地図から消えた国々もある。

我が国においては、勿論、戦国時代においては国境という感覚が、領地内の人々にはあったかもしれない。しかし、現代史において、二回も国境をかえるということは、ヨーロッパの人々でなくしては味わえ得なかつたことであり、我が国において、島国の中における限りは到底感じ取れない問題ではないかと思つたのである。

ヨーロッパの旅行や、特に西ドイツに滞在して、しばしば感じたのは、愛国心ということであった。自分の国のよさを誇り、他の国にはないよいものを自分が持っている——こうした誇りは、至る所で感じられ、時には鼻持ちならないこともあった。我が国の謙遜した立場と較べると、西ドイツにせよ、イギリス、フランスはもとより、ベルギーやオランダに至るまで、ヨーロッパに冠たる国という気持を持っていることが、会う人ごとに感じられてならなかつた。このようなおとなの気持は、当然、子どもたちも受け取つていくであろう。そして、自分の国を見る見方を規定するだろう。我が国には何にもいい点がない——と歎き、逆に、欧米のこととなると夢

ここで初めて松の緑を見た。梢のかなたに城が見える。



中になり、よいものと信じ込んでしまう日本人。

私は、そうした点の解決を、国境の町々を眺めるだけでも何か期待できるような気持ちに誘われたのである。

旅は、ケルンに始まりルクサンブールにいき、メッツからストラスブールに出て、後にドイツ国内に南から北に戻ろうというプランである。

私は、このプランに、一、二週間前からひとりで興奮していた。世界の幸福を求めて、それらの土地に新しい鍵でも落ちてきているのかのごとく、私は期待に胸を躍らせた。

ルクサンブールは大公国。こうした読み方はフランス語の発音によるもので、ドイツ人はルクセンブルクと呼んでいる。僅か二千五百平方料の面積と、三十一万人の人口を持つ小さな国である。その歴史は、十五世紀にはフランスに、十六世紀はスペインに、その後再びフランスに占領されたり、十八世紀にはオーストリアに帰属したり、ドイツ連邦の一員となったりしたが、遂に永世中立を宣言した。

その後、中立国として、第一次・第二次大戦ではドイツ軍に占領されたが、その後ベネルクス三国の一つとして独得の存在を示している。

ケルンを出発した汽車が、数時間でアーヘンにつくと、ディゼルカーに乗りかえなければならぬ。そこには、ドイツ側の税関とルクサンブールの側の税関とがあつて、バスポート(旅券)の点検をうけ、その中に出国・入国の印を押してもらつたことは言うまでもない。ルクサンブールに泊るかどうか、宿泊には予定を立てていない旅であつたから、あるいは数時間後にはこの国を出てフランスに行くことになるかもしれない。その時には再び入国・出国の印を捺してもらふこととならう。

私は一時間余り、二台連結の電車の一番前の席に腰をおろして、窓外の景色を楽しみながら、ゆれていった。いくつもの小高い丘を越えた。何本かの川が線路伝いに走っていた。おそらく、モーゼル川の支流なのであろう。牧場と畑地とは至る所に見られる。この国の主な産業は、牧畜業と農業であるし、エンバクとジャガイモを栽培しているが、自給できないので荒地を開発して生産をあげて生産の向上をはかっているという。しかし、むしろ、至る所に森が続いている光景が見られた。

首都も、国の名と同じルクサンブールである。電車がその駅に間近くなったのは、十二時近くであつたらうか。鉄橋を渡ると、その谷合いのつきるあたりが小高い丘になつていて、うっそうと樹木が茂っているのが見られた。町全体がこの大きな谷によつて、旧市街と新市街とに分けられており、谷底は公園になつているのである。

城の見える丘には、みやげ物を売店がある。
どこからかの小学生が絵葉書を買っていた。



モダンな駅に降り立つと、市内を歩く予定を立てるために、早速地図を買った。公用語としてはフランス語が用いられている。であるが、国民が日常に使うことはドイツ語であるという。地図もフランス語のスペルでかかれていた。わずか人口七万近い首都であるから、徒歩で一と廻りをしてもたいしたことはいない。私は、駅を背にして右に折れると、街路を歩き始めた。

五階・六階というなじみの深いヨーロッパ風の建物を左右に眺めながら、ゆっくりとした足取りで歩いていく。行き交う人々も、肩をすり合わせなければならない程多くはない。彼らも、ひとりの東洋人が写真機と鞆の吊革を肩にして歩いていく姿を、振りかえって見るでもなく、おそらく昼飯のための買出しであろうか、せっせと歩き過ぎる。私は、ショーウィンドーの中をのぞいたり、広告の看板を眺めたり何かこの都市に独得なものがないかと期待しながら、更に歩みを進めていった。

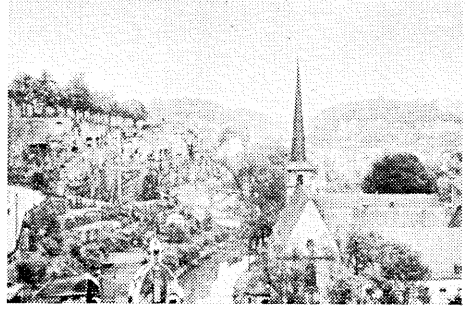
ものの二十分もすると、町並みが途絶えて、

そこに橋がかかって来た。この橋の下の方を今乗って来た電車の鉄橋が、赤茶けた腹と煉瓦作りの細い足を見せていた。リュクサンブールの谷。そしてこの谷は、多少の屈曲を示しながら、私が立っている橋の下をくぐり、次第に上り勾配を示しながら、丘に面して左へと消えている。

正面の丘は、緑一と色であった。多少くすけた感じの緑ではあったが、下から見上げると、天の中空までそそり立っていた。その中に、よく見ると、点々と人家が存在しているのがわかる。私は、眼鏡をふき直してから、再び丘の緑を見上げ、谷底へ目を移した。ふと、しばらく忘れていた俳句がうかんできそうな気がした。ヨーロッパに生活して半年以上にもなるが、ついぞ頭に上って来なかった俳句のことであるし、芭蕉の「奥の細道」はすでに、部厚い洋書の脇で影を失っていたのであった。こうしてしばらく橋桁にもたれて考えていたが、私の背後には一、二回静かに自動車を通ったか、あるいは自転車が通ったか、いまは思い出せない。そうした現代文明の利器に私の思いをかき乱されなかったことだけは確かである。遂に、心に納得のいくような俳句は作ることが出来なかったけれど、その数十分の深閑とした気持は、今もなお忘れることが出来ない。

橋を渡ると道は左に折れ、だからと登り坂となる。それを登りつめると、城と谷をへだてて直面した台地になっており、そこにも公園があるはずになっていた。だからだらした坂道——勿論その道はしっかりと舗装されているために、私の足首はコツコツと響くのであ

古い城の壁がつづいている下を、どんよりと川が流れてゐる。



ったが、その響きを受けてとめるかのように、右側には林の幹々が立ち並び、左側は谷合いまで木々の梢がづづいていた。

ふと、左手に松林が、梢となつているのに気付いた。

確かに松林である。

私は、日本を離れて以来、ついぞ松を見たことがなかった。松の

枝、小さい枝の間の松ぼっくり。その松ぼっくりは、よく見ると固い実のままにたくさんついていた。松ぼっくり——があつたとき、という幼稚園の歌が、口ずさまないまでも、私の頭の奥の方から流れてきて、私は思わず頬笑んでしまった。松の梢は、近づくにつれてその下にたくさん枝振りを見せていた。あのなつかしい枝振りを支えている幹には、ささくれたような木の皮が、茶色の肌をちらちらのぞかせている。私は、立ちどまって、大きく息を吸った。

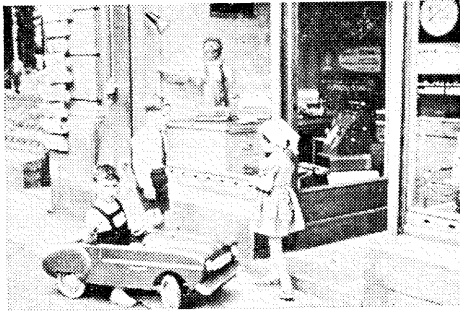
台地につくと、そこには小学生の一団が来ていた。黒服の尼さんが先生なのであろうか、土産物を売る小さなボックスの周囲で思い思いのものを求めていた。子どもたちが使うことばはフランス語で

あつたから、フランスから遠足に来たのかもしれない。とりどりの色の洋服を着て、大きい子もいれば小さい子もいたが、振舞い方を見ていると同じ学年のようであつた。絵葉書を買った子どもたちは、早速、背後のベンチなどを台にして、それぞれの宛先へ、何を書いているのか、ペンを走らせている。——二、三十人の団体であつたろうか。今、思い起こしてみるのであるが、少しも高い話し声がない。こえなかつたことである。小学生の集団がいて、あの独得な騒々しきがあるはずである。しかし、この台地の林の中の小学生は、少しも話し声を立てないように、手紙を書きおえたのか、あるいは先生に誘われたのか、私とその集団からちよつと目を離して、城を正面に眺めることの出来るベンチの方へ歩いていく間に、すでに背後からは姿を消してしまつた。

ベンチは、いくつもおいてあつた。しかし、人は三、四人しかいなかったし、多くはぶらぶらと歩いてきたから、城に向かってベンチに腰を下しているのは私だけであつた。疲れてはいなかつたが、じゅうぶんにベンチの背にもたれかかつて、足を伸ばし、そのままの姿勢で、城を見た。城は何階建てかの四角い感じの建物で、ゆるぎなく立っていた。私は、城の周囲を見やつては、再び城に目をもどしたが、城は相変らずゆるぎなく立っていた。

何百年前に建てられたものか、よくは知らない。たびたび支配する国が変わつたが、どのような人が栄華を極めたか知らない。しかし何世紀かの時にこの城が建てられて以来、多くの人々を受けとめて来た城にちがいない。その人々が、この城に出入りするたびに、今日

目抜き通りの通りには、子どもが遊んでいた。
文房具屋の前である。



のような時代を予見したであろうか。いずれの支配者にせよ、自分たちの城が、この世の中に冠たるものであるといういささかのうぬぼれを持たなかったものがあるだろうか。そして、そこに出入りする人々も、自分の幸福をこの城に結びつけて考えようとしたのではあるまいか。

私は、これまでたくさん城や宮殿を見てきた。そのたびに、人の世の盛衰ということをしみじみ感じてきた。同じ国の中にあっても、時代とともに支配者の姿が変わってきた。まして、このように国境の町で、さまざまな国の支配を受けて来た人々。それは、このルクサンブールの国の人々の祖先であった。しかし、その祖先は

もういない。そして、新しい人々が、新しい思いをもって、幸か不幸かは知らないが、やはりこのルクサンブールの国に生を営んでいるのである。

×

私は、そこで半時ほどまどろんだらしい。冷い風を首筋に感ずると、再び立ち上った。そして、もと来た道を

そくさくと下り、橋を

渡らずに谷に沿って下った。鉄橋の下を通りぬけて、十二世紀に築

かれた城あとが、壁土

だけを残している所へ

いった。偶然、そこか

ら谷底にひらけている

のは、灰色の町であっ

た。私は、ひとりの男

の人に、そこがスラム

であることを説明して

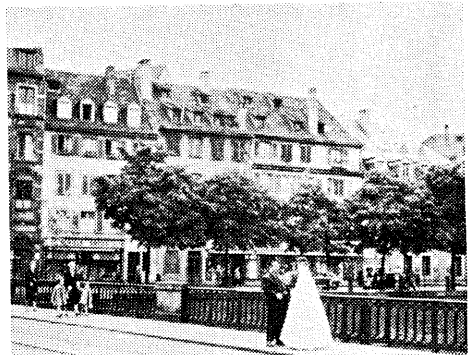
もらった。貧弱な教会

が、すすけた赤煉瓦の

屋根をときわ高く示していたが、何といても谷底にあるスラ

ム。そのわきを水は淀んだままゆっくりと流れていた。

(写真はすべて平井氏が撮したもの)



橋の上で、花嫁衣装の人に会った。

☆

☆

☆